



退職のあいさつに行った上司から、こんな言葉を投げかけられた。「君なあ、子どもたちが理科を嫌いと言っているのを知っているか。何とかならんのか」

45年間務めた日立製作所を退職後、小中学校の理科授業の実態を調べ、「子どもたちは理科が嫌いなわけじゃない。原因は授業が楽しくないことだ」と気がついた。

「じゃあ、楽しい実験を体験してもらおう」と2009年5月、日立製作所グループのOB技術者らを集め、小中学生の理科教育支援を目的とした「日立理科クラブ」を設立した。日立市の全面的な協力もあった。

学校の理科室へ行き、実験の準備や補助をしたり、教諭や児童生徒の相談に応じたり

「日立理科クラブ」代表理事 佐藤 一男 さん 74



する「理科室のおじさん」。市内の小中学校40校の理科授業支援、中学生対象の理数アカデミー、水ロケット教室、モノづくり教室。設立から2年以上が経過し、同クラブのユニークな取り組みは、教育現場からも高い評価を受けている。

◆ ◆ 青森県七戸町生まれ。中学

実験で「理科好き」増やす

生の時に出会った恩師が技術者への道を開いた。

「電気班(理科クラブ)に入れ」と誘われた。電子とか、分子とか、真空管とかを勉強し、そしたら先生がラジオを作ろうと言いついてね」

昭和20年代。田舎町にはラジオなんか売っていない時代だった。だが、その恩師は町内の電器店に東京・秋葉原で

組み立てキットを買ってきてほしいと頼み、「並三球真空管ラジオ」のキットを手に入れた。

食べることに精いっぱいだった。高額の買い物だったが、「お袋が電器店に『支払いは、月賦の月賦でお願いします』と頼み込んでくれた」アルミケースに穴を空け、ヤスリで削り、トランスやコ

賀工場で冷蔵庫用モーターの組み立て実習を受けた。「物おじさんなので、色々なことをズケズケ聞いた。それが良かったのかな」。実習から戻ると、内定通知が届いた。

入社し、面接で「体は小さいけど、でっかい発電機を作りたい」と言うと、各種大型発電機や大型モーターなどが主力の日立工場に配属された。以来30年間、同工場勤務し、栃木工場を経て東京本社へ。常務、専務を務め、05年に退職した。

ンデンサーを取り付け、夢中になって、1か月以上かかって完成させた。「配線が正しいと、最初に真空管の頭に触るとブーと鳴る。僕のは一発で鳴った。チューナーを回すとキーカー、キーカーと鳴り、あるところで突然、青森放送が入った。鳥肌が立つくらい感動した」と振り返る。

◆ ◆ 岩手大に進学し、電気工学を学んだ。日立製作所には当時、実習生受け入れ制度があるが、大学4年生の夏休みに多

10月23日。日立市会瀬町の日立会瀬クラブラウンドで開かれた理科クラブ主催の「ひたち水ロケット大会」。ペットボトルで作った自慢の水ロケットを勢いよく飛ばす子どもたちを、うれしそうに表情で見守った。

「理科の力、モノづくりの力がないと日本は成り立たない。『日立理科クラブ』の子どもたちの中から、ノーベル賞をもらうような科学者が出るかもしれないよ」

(富田智晃)